指宿式土器の色調から見た交流の断片

黒川　忠広

A Segment of Cultural Intercourse Seen in Tone of Color on Ibusuki-type Potteries

Kurokawa　Tadahiro

要旨

南九州の縄文時代後期に位置づけられている指宿式土器には，桃色や赤紫色などの特徴的な発色が見られる。この土器は，主に指宿地方に出土し，指宿式土器の他に成川式土器にも見られる。今回筆者は，この土器の色調に注目し，この要因について言及した。その結果，発色の要因となったものは指宿地方にある温泉変質粘土である可能性を指摘した。また，指宿式土器の中におけるこの色調の土器の分布から，土器そのものが搬入されたことが考えられ，当時の交流の断片を指摘することが出来た。

キーワード　土器の色調　指宿式土器　指宿焼成色　温泉変質粘土　交流

1　はじめに

土器の色調は，製作時における粘土や混和剤中に含まれる鉱物の種類や量に加えて，焼成による変化によって決定する場合が多い。

筆者は南種子町藤平小田遺跡（南種子町教育委員会2002）の調査・報告書作成を通して，赤紫色・紫色・青紫色・桃色等の発色を呈する土器の一群があることに気づいた。このような色調を有する土器の類例を探っていくと，縄文時代後期の指宿式土器や古墳時代の成川式土器に多く見られ，量的には指宿地方が多く，その対岸に位置する根占地方にも存在していることがわかった。ところが，両時期共にこの色調が一般的なものではなく，これらの地域から離れるにしたがい，この色調の土器の出土量は減少する傾向にある。

このことから，この土器の分布を調べることで，土器型式の分布圏内における小ないし中規模の行動領域がおさえられ，当時の交流などといった人間の活動の一端を示す手がかりとなる，と考えた。小稿では指宿式土器の色調から，縄文時代後期の指宿式土器期における交流の断片について論じていくことを目的としている。

2　土器の色調に関する先行研究の紹介

南九州に於いて，土器の色調を中心にした論考は，筆者の知るところ若干指摘されている程度である（松本1995）。しかし，発掘調査報告書や資料紹介の中においては，様々な指摘がなされており，これらを引用しながら先行研究を紹介していきたい。

まず，のちの指宿式土器設定につながる指宿市橋牟礼川遺跡の調査報告を挙げたい。この遺跡の報告を行った濱田耕作は，「下層から発見せられた土器の大部分は，紅色を帯び，砂を交へた粗末な地質を有し」と特徴を述べ，その要因についても「紅色を呈してゐるのは，熱した火山灰の層中に有って，元来は他の遺跡に於いて発見せられる土器と同じ様に黒褐色を呈したものであった」と言及している（濱田1921）。その要因については，火山灰埋土による変色を想定されており，今回筆者が述べる要因とは異なっている。だが，これが指宿式土器に特徴的な色調のものがあることを指摘した最初のものであり，筆者が述べるまでもなく，その観察は極めて卓見といえよう。

その後は，戦後の河口貞徳の精力的な調査研究の中でしばしば登場している。指宿式土器に関して，「色調は黒褐色であるが時に茶褐色を呈するものもある」と，他の資料とやや趣を異にしている色調のものが存在していることを指摘している（河口・河野1955）。これが，今回題材として取り上げたものと合致するかは明確でない。ただし，注目されるような色調の土器が存在していることは明らかだったようである。しかし，これが何処の何に由来しているか等論究されることはなかった。

1980年代にはいると，今回取り上げる色調に関して明確に指摘されるようになる。

山川町成川遺跡の報告では，指宿式土器の概要説明の中で「色調は茶褐色・黒褐色などのほか，指宿地方特有の紫・赤紫色を呈するものも多い」として，指宿地方特有の色調があることを指摘している（出口ほか1983）。

大根占町轟木ケ迫遺跡では，古墳時代の遺物を説明する中で，薩摩半島南部の資料に焼成・胎土が類似している点を挙げ，「錦江湾を越えて持ち込まれた」ものと位

置づけている（戸崎・東 1988）。また，同時に刊行された大根占町出口遺跡では，「成川式土器群の中には，（中略）赤褐色の色調を呈し，胎土には多くの砂粒を含み，器面はピンポール状になりざらざらと焼上る」特徴を挙げ，この一群は，「錦江湾をはさんだ対岸の薩摩半島南部に出土する成川式土器であることから，本地域には海を渡って持込まれた」ことを指摘している（戸崎・東 1988）。

田代町立神遺跡では，指宿式土器の説明の中で「明桃色を呈し，胎土に多くの砂を含む土器は指宿地方に一般的な土器に類似している」ことを指摘している（吉永・東 1990）。これをふまえ，薩摩半島との強い関係を指摘している。

指宿市新番所後遺跡では，古墳時代の土器に，「指宿地方特有の赤紫色を呈する粘土に多量の砂粒を混入し，ザラザラした感じを持つものが多い」点を指摘している。更に，「器壁の厚いものばかりでなく，（中略）薄く作られるものにも見られる」ことを挙げている（繁昌・長野 1992）。ここで，この要因が粘土にあることを指摘された。その後，喜入町帖地遺跡では，指宿式土器や疑似縄文土器の説明において，「色調は，（中略）やや桜色を呈した赤褐色で，在地の粘土で製作されたものである」と，在地粘土を用いた結果，色調に変化が生じたと指摘している（永野 1999）。

このように，指宿市を中心とする地域の報告において，土器の色調に関して指摘がなされている。そして，この要因としては粘土によるものであると想定している例が多い。

次に，周辺地域において，報告されている例を紹介したい。中種子町鷹取遺跡では，指宿式土器の説明の中で，「指宿地方で出土する土器と胎土・焼成が，極めて似ていて，搬入品の可能性が考えられる」と紹介されている（立神・堂込 1989）

西之表市浅川牧遺跡においても，指宿式土器について，「この種の土器は山川町成川遺跡出土の土器（色調は赤味を帯び，胎土の粒子が粗い）と極似し，種子島の土器とは様相が異なっていることから，土器が直接持ち込まれたものと推定」されており，交流の視点からこの色調の土器を位置付けている（青崎 1994）。また，南種子町藤平小田遺跡においても，指宿式土器の説明の中で，「この色調のものは，主に指宿地方や対岸の根占・大根占地方に多く見られ，他の地域にもある程度の広がりを見せている」点を指摘し，交流の断片としての位置付けを行っている（坂口・黒川 2002）

以上，報告書を中心に研究史をまとめると，指宿地方の粘土を用いた場合，桃色などの特徴的な発色をするという大まかな部分で見解が一致していることがわかる。そして，指宿式土器や成川式土器にほぼ限定でき，これらが対岸部や熊毛地方で出土することは交流の一環を示すものであると位置づけられている。

3　指宿焼成色を呈する指宿式土器

ここでは，特殊な発色を呈する指宿式土器が出土している代表的な遺跡の資料について概観していきたい。なお，この色調に関しては，「指宿焼成色」という表現で述べていきたい。

山川町成川遺跡（第2図1～31）

報告されている資料の大半が指宿焼成色である。また，出土量は極めて多く靴形文を中心に出土している。この靴形文を施す一群は，水ノ江和同によって「成川タイプ」と呼ばれている（水ノ江 1993）。三輪晃三は，当遺跡で主体を成す一群以外で，指宿焼成色を呈しないものに注目し，「胎土・色調・調整からみて搬入土器の可能性」を指摘している（三輪 1998）。

指宿市大渡遺跡

資料数は，成川遺跡と同じく極めて多い。指宿式土器には，靴形文・音符文など多数のバリエーションが存在する。実見した限りでは，赤桃褐色などのいわゆる指宿焼成色のものが多数を占めている。この他に，松山式・市来式・丸尾式などの資料も出土しており，この内，松山式・市来式に1点ずつ指宿焼成色を確認することが出来た。ただし，出土量に比べるとこれは極少量である。

喜入町帖地遺跡（第2図32～第3図49）

遺跡の位置は，指宿市に近い。このためであろうか，指宿焼成色の指宿式土器は比較的多い。特に，32は完形に近く，ススの付着状況などが読みとれる良好な資料である。また，46・47は疑似縄文が施文されている。

伊集院町諏訪免遺跡（第3図55）

現在，薩摩半島の中で最も北西に位置している遺跡である。

鹿児島市大龍遺跡（第3図58～60）

数次に渡る発掘調査の内，鹿児島市教育委員会が報告した市報32・33掲載資料について実見した。指宿焼成色の指宿式土器は，指宿Ⅰa式と報告された資料の中に5点確認できた。いわゆる靴形文を施すタイプのようである。

根占町前田遺跡（第4図94～101）

指宿式土器を主体とする遺跡で，これに次いで市来式土器が出土している。縁帯文的な口縁部形態のものも出土しているが，これらには指宿焼成色を呈するものは確認できなかった。

南種子町藤平小田遺跡（第4図106）

筆者の知るところでは，最南端の出土地である。指宿式土器以外では，市来式土器や納曽式土器などが出土しており，出土量はこれらの方が指宿式土器よりも多い。

以上，概観してきた。この他にも，表1に示した遺跡

第１図　遺跡位置図

表１　遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	備考
1	成川遺跡	揖宿郡山川町	
2	大渡遺跡	指宿市十二町大渡	
3	橋牟礼川遺跡	指宿市十二町丈六下里	
4	帖地遺跡	揖宿郡喜入町帖地	
5	田中堀遺跡	川辺郡川辺町	
6	芝原遺跡	日置郡金峰町宮崎	未報告
7	上焼田Ａ遺跡	日置郡金峰町宮崎	
8	木落遺跡	日置郡金峰町宮崎	
9	小中原遺跡	日置郡吹上町	未報告
10	草野貝塚	鹿児島市下福元町草野賀呂	
11	御訪免遺跡	日置郡伊集院町郡	
12	山ノ中遺跡	鹿児島市五ヶ別府町	未報告
13	福昌寺跡	鹿児島市池之上町	
14	大龍遺跡	鹿児島市大竜町	
15	中原遺跡	姶良郡姶良町脇元	
16	上野原遺跡	国分市川内	
17	柊原貝塚	垂水市柊原	未報告
18	中ノ原遺跡	鹿屋市大浦町	
19	鎮守ヶ迫遺跡	鹿屋市南町鎮守ヶ迫	
20	前田遺跡	肝属郡根占町横別府桜ヶ尾	
21	立神遺跡	肝属郡田代町大原立神	
22	大泊貝塚	肝属郡佐多町大泊	
23	浅川牧遺跡	西之表市現和字浅川牧	
24	鷹取遺跡	熊毛郡中種子町坂井鷹取	
25	藤平小田遺跡	熊毛郡南種子町島間	

が筆者の知るところであるが，実際はこれ以上の遺跡で存在しているものと思われる。肉眼観察という客観性に欠け不十分な要素を含んではいるが，大まかにこの粘土を素材とした指宿式土器の分布は，やはり指宿地方に多いことがわかる。

4　焼成実験

次に，実際に粘土を採集し指宿焼成色を立証していきたい。粘土は，指宿地方の露頭で採集した[1]。特筆すべきは，噴気周辺の粘土が，露頭採集の段階から淡桃色を呈していたことが挙げられよう。指宿地方には，各所で噴気が認められ，噴気で有名な場所としては鰻池がある。この池は，指宿火山群の一角に作られた火口で，周辺には，地熱地帯が広がっている。噴気が各所に見られ，温泉の泉質は硫化水素泉である。この周辺には温泉変質を受けた岩石が認められ，開聞町史によると，温泉変質を受けた岩石として陶土を挙げ，その特徴を，「鰻池一帯に分布し，各種の安山岩が温泉変質作用を受け，白色～淡桃色の粘土に変化したもの」とまとめている（開聞町1994）。この指摘や露頭の状況からすると，この温泉変質粘土が最も本論に適していると思われる[2]。これらの点も踏まえ，今回実験対象とした粘土は，第５図にある露頭からそれぞれ採取したものを用いている。なお，粘土Ａ～Ｃを採集した場所は，「カオリン山」と呼ばれている。

粘土Ａ：指宿市東方（写真１）

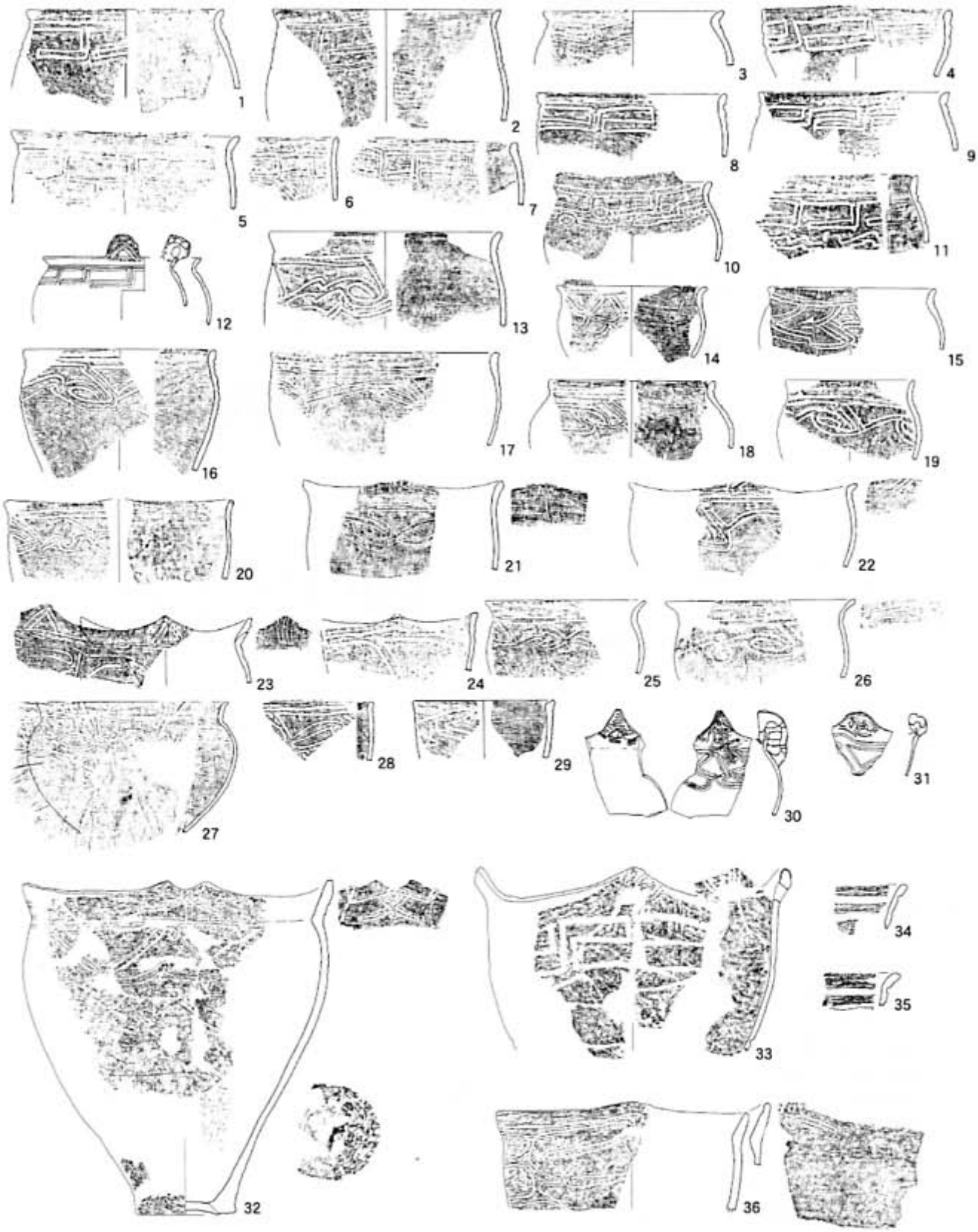
法面から採集した。噴気により，淡桃色から赤褐色に変色している部分を中心に採集を行った。ザラザラとした感じのするものであったが，練り込むとすぐに粘質が増した。だが，小礫を多く含んでいるためにこの除去は難しく，粘土Ａのみで製作したテストピースでは，乾燥の際に小礫部分からのヒビ割れが激しかった。その一方で，混和剤を用いたものや他の粘土と混ぜ合わせたものに関しては，このようなヒビ割れ現象は認められなかった。

粘土Ｂ：指宿市東方（写真２）

粘土Ａに隣接するが，特に噴気が多量に出ている部分から白色の部分を抽出して採集した。噴気孔直上であるためか，白色化しているものが多い。表面はやや硬いが，表面を剥ぐと中は柔らかく粘質があった。また，噴気の熱により高温であり，素手で触ることは出来ない。

粘土Ｃ：指宿市東方字巣目（写真３）

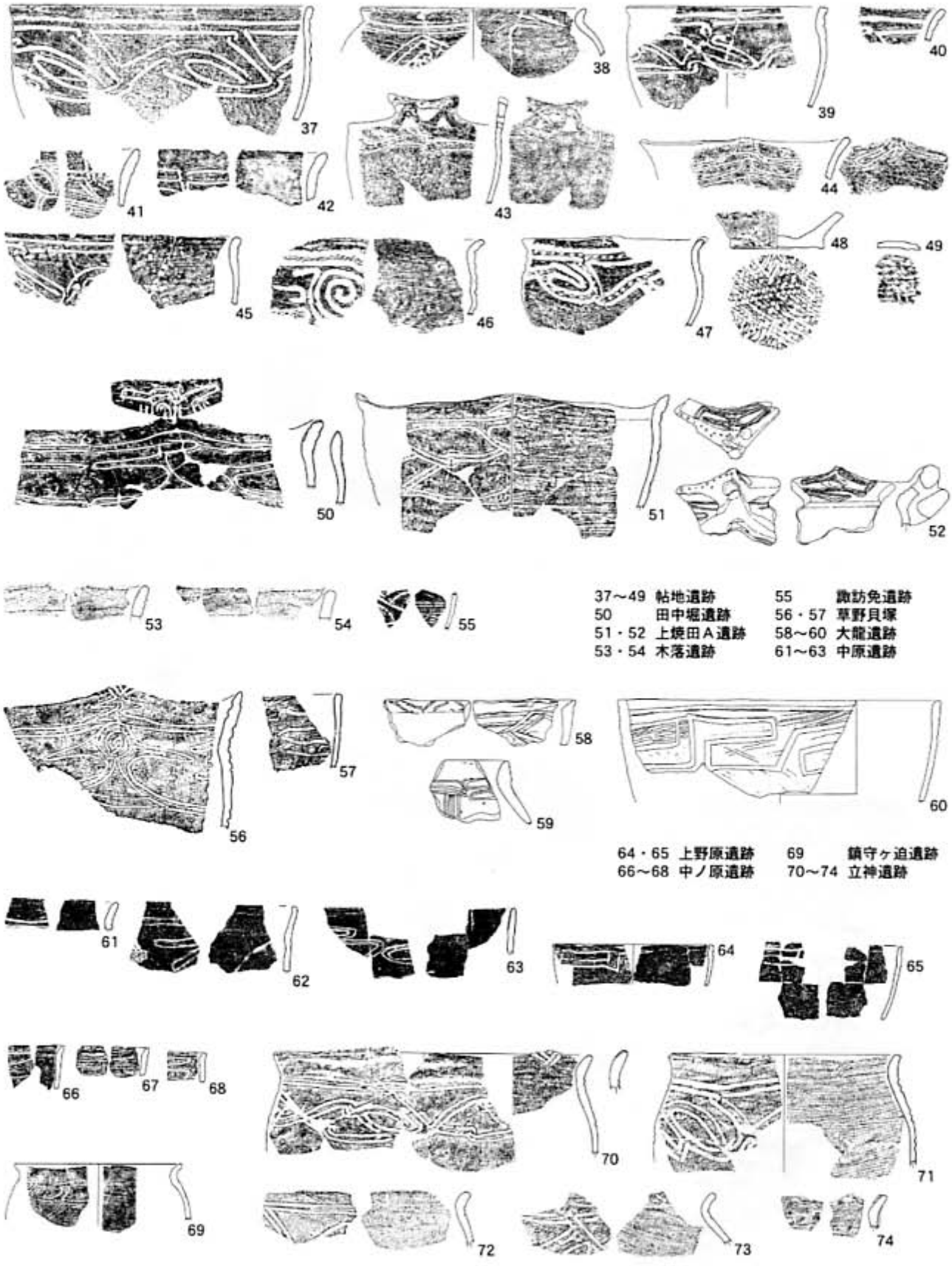
湯之峯神社の横に，面的に広く噴気が確認できる。場所によっては，小地獄状を呈している部分も見られた。



1～31 成川遺跡
32～36 帖地遺跡

S=1/6

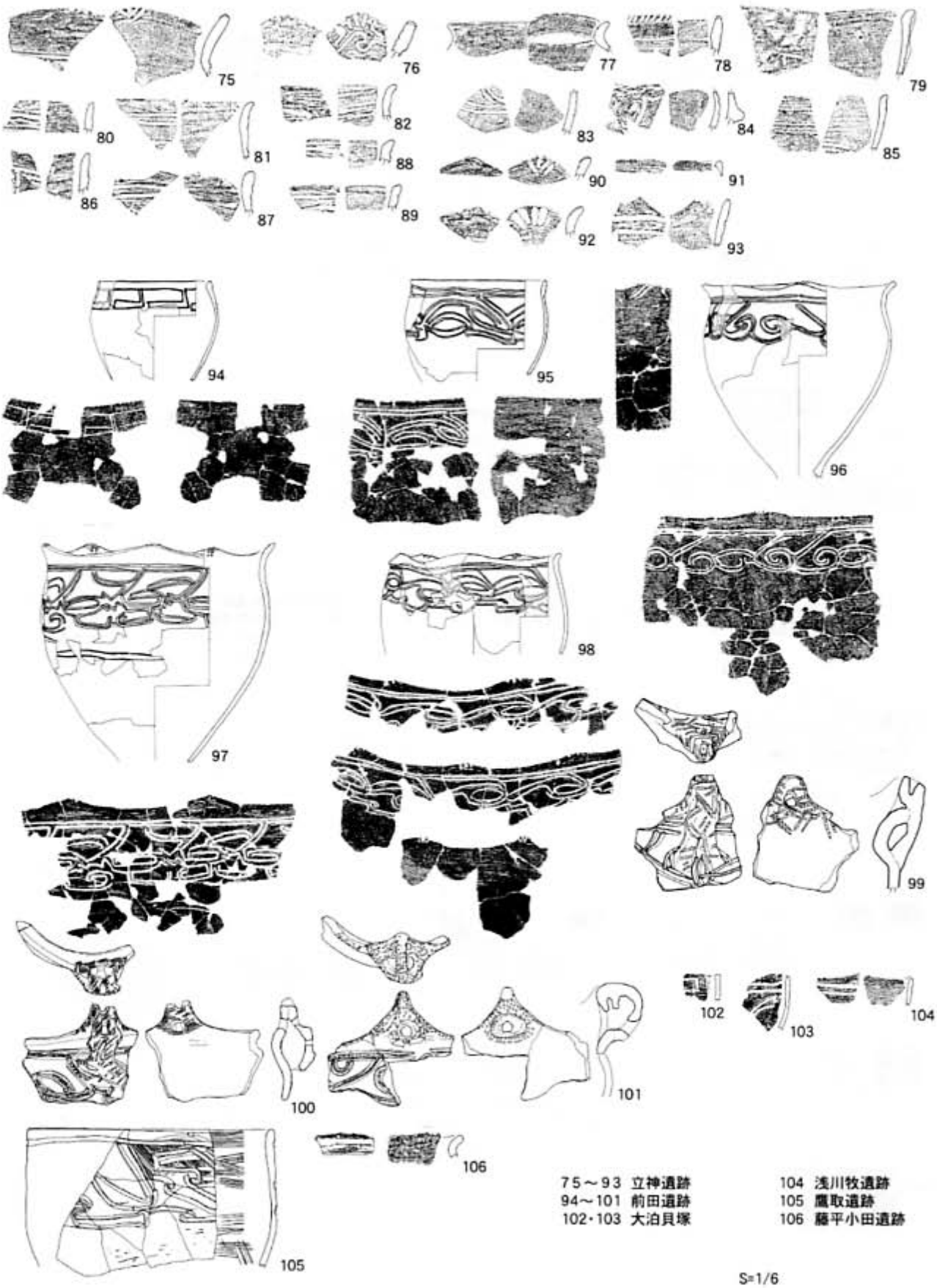
第２図　指宿焼成色の指宿式土器（1）



37～49 帖地遺跡
50 田中堀遺跡
51・52 上焼田A遺跡
53・54 木落遺跡
55 諏訪免遺跡
56・57 草野貝塚
58～60 大龍遺跡
61～63 中原遺跡
64・65 上野原遺跡
66～68 中ノ原遺跡
69 鎮守ヶ迫遺跡
70～74 立神遺跡

S=1/6

第３図　指宿焼成色の指宿式土器（2）



第４図　指宿焼成色の指宿式土器（3）

第５図　粘土採集地点

鼠色に変色している部分を採集した。この地点も，粘土Ｂと同様に，素手では触れない温度である。

これらの採集した粘土を練り込みテストピースを製作する。ここで，混和剤比による色調の変化も調べるために，「粘土：砂」の割合を「10：０」及び「７：３」の２種類を用意した。なお，混和剤についても本来であれば地元産のものを用いるべきであるが，金峰町上水流遺跡のＶａ層（縄文時代中期遺物包含層）より下位の層を採集して混和剤とした。

次に，粘土Ａ～Ｃを各1/3ずつ混ぜ合わせたものも製作した。

また，粘土Ａ・Ｂ・Ｃと他の採集粘土とを半々に混ぜ合わせたものも製作した。混ぜ合わせた粘土は，松山町牧ノ原Ｂ遺跡の薩摩火山灰層直下のⅧ層を使用した。そして，テストピースは最終的には表２の通りになった。

次に，焼成実験を行った。焼成は，テストピース製作後半月ほど乾燥させた後に行い，焼成時間は２時間程度を要した。結果，表２のように噴気周辺の粘土に関して，桃色などの発色が認められた。また，表面も「ザラザラ」とした感じを呈している。

以上のことから，この指宿焼成色の原因は，在地粘土の中でも温泉変質粘土を使用した場合に生じる可能性が確認された（写真４）。

ここで注目されることは，赤褐色のＡ，白色のＢを混ぜ合わせると，桃色を呈することである。各遺跡から出

表２　テストピース一覧

番号	粘土			混和剤量	粘土混合量	焼成後の色調
	A	B	C			
1	100	0	0	0	0	黄茶褐色
2	70	0	0	30	0	茶褐色
3	50	0	0	0	50	黄茶褐色
4	0	100	0	0	0	白褐色
5	0	70	0	30	0	淡桃褐色
6	0	50	0	0	50	白茶褐色
7	0	0	100	0	0	白紫褐色
8	0	0	70	30	0	淡黄褐色
9	0	0	50	0	50	明灰茶褐色
10	33	33	33	0	0	淡茶褐色
11	50	50	0	0	0	淡桃褐色
12	33	33	0	33	0	淡桃褐色
13	66	33	0	0	0	淡紫褐色

土する指宿焼成色の土器を観察すると，桃色・赤紫色・赤桃色等様々な色のバリエーションが存在していることがわかる。噴気周辺の温泉変質粘土も，わずかな場所の差によって粘土そのものの色調は異なっており，これらは採集・調合の段階で自ずとブレンドされてしまう。このことから，指宿焼成色のバリエーションの豊富さは，焼成による変色や埋没後の周辺の土質等の影響もあろうが，噴気周辺の温泉変質粘土そのものの色調のバリエーションを反映しているものと思われる。つまり，粘土採集段階ではある色調のみを抽出するなどの行為は行っていなかった可能性が考えられるのである。そして，温泉変質粘土を産しない地域においては土器そのもの若しくは素材としての粘土が搬入されていた可能性が高い。この点について，次節以降検討していきたい。

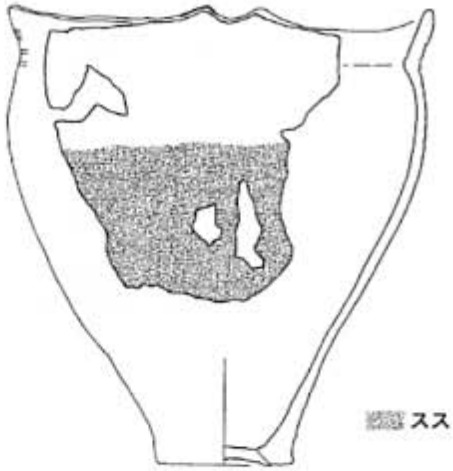
５　土器の色調から見た交流の断片

４で検証したように，指宿焼成色の原因は指宿地方の温泉変質粘土に求められる可能性が高いことがわかった。

では，このような指宿焼成色を呈する指宿式土器には，他の色調の指宿式土器と比べて使用目的などにおいて何らかの特殊性が見いだせるであろうか。深鉢形は主に煮炊き具と考えられており，出土資料にはススなどが付着している例も多い。指宿焼成色の土器にも，他の色調の土器と変わりなくススなどが付着している例がある。

例えば，32は，胴部最大径より下位にかけてススが付着している（第６図）。これに対して，内面は均一に明赤桃色を呈している。また，45も沈線文部分以外にススが付着している。36も外面にススが付着しているが，内面は均一に明赤桃色を呈している。このように多くの資料でススなどの付着物が認められ，色調から土器そのものに特殊性は見いだせない。

また，多くの資料は包含層中に他の色調のものと混在して出土しており，出土状況からの特殊性も見いだせない。このことは，やはり在地粘土を用いたことによるこ



第６図　指宿焼成色におけるスス付着状況

とが原因で，意図的にこの色調を好んだとは言い難いものと思われる。

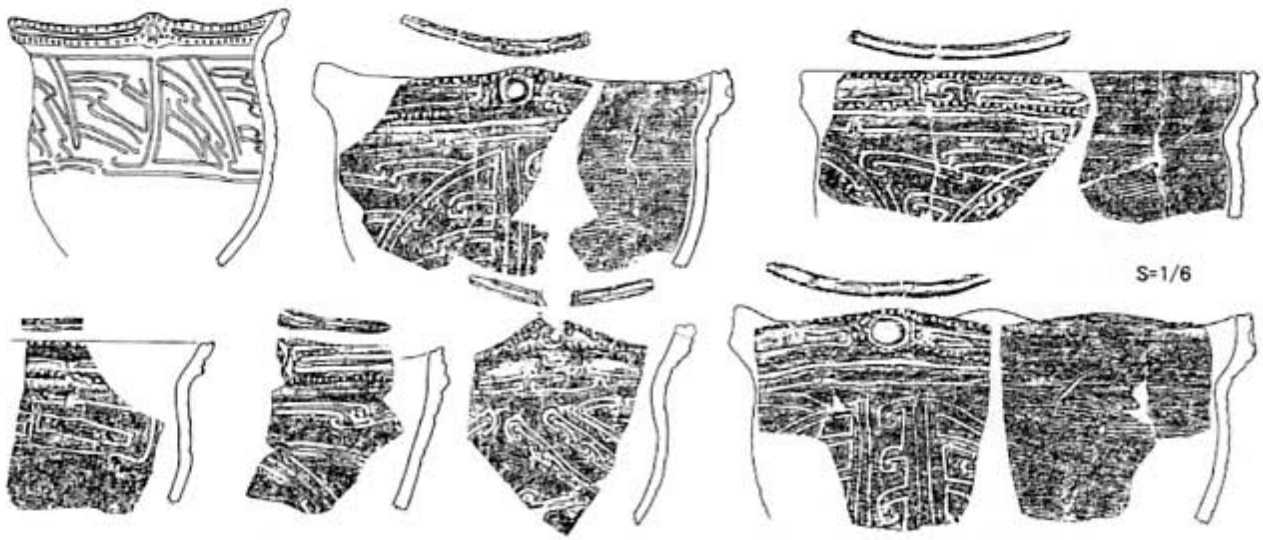
さて，指宿式土器とは，指宿市十二町橋牟礼川遺跡出土の資料を標識とする縄文時代後期前半の南九州を代表する土器である。指宿式土器という名称は，寺師見國によって提唱された（寺師 1943）。これを基に，河口によって研究が深化され現在に至っている（河口 1952）。磨消縄文土器の南九州への流入と展開を論ずる上で欠かせない土器でもあり，水ノ江（水ノ江 1993）や松永（松永 1989）らによって細かく論究されている。近年では，三輪によって細分案が示されるなどしている（三輪 1998）。ここでは，本題から外れるために言及は控えたいが，指宿式土器は，概ね２本の併行する沈線文が口縁部から胴部上半部にかけて施文されるものと理解している。そして，これらが組み合わさり音符文，靴形文等を呈する。なお，この沈線文間は無文のものの他に，貝殻刺突文や連点文などのいわゆる疑似縄文とも呼べる手法で施文されているものもある。器形に関しては，口縁部が直行ないし外反して口唇部は丸みを呈するものや，松永によって「外来の影響のもとに生じた口縁部形態」としてＢ類に分類された口縁部文様帯を作出するものなどがある（松永 1989）。波状口縁の場合は，波頂部にアクセントとして縦位の沈線文などが施されている。胴部は，やや膨らむが資料によっては最大径が胴部に求められるものもある。底部は平底で，多くに編み物などの圧痕が観察できる。

以上のような型式概念を基に，温泉変質粘土を用いたと考えられる指宿式土器を見ていきたい。

まず，最も指宿焼成色のものが多いのが，成川遺跡に代表される靴形文を施す一群であろう。松永は，指宿式土器のバリエーションの豊富さを説明する中で，在来と外来の要素とに分け，このタイプを在来要素が多いものと位置づけている（松永 1989）。これで見ると，成川タイプ（水ノ江 1993），あるいは成川Ｋ式土器（三輪 1998）として位置づけられているこの資料で，かつ，指宿焼成色を呈している点は，地域性を示すものとして十分に理解できる。

次に，松永が「明確な線引きを行うことは出来ない」とした上で外来要素多とされた，中原ＶＢ類に代表されるタイプ（第７図）には指宿焼成色は認められなかった。また，器形は在来で文様は外来といった中間の様相を併せ持つタイプには，指宿焼成色は認められ，このタイプそのものの分布も薩摩半島に広がっている。

次に，指宿焼成色の分布を見ていきたい。先に述べたことであるが，指宿焼成色の指宿式土器は指宿地方に多く，指宿式土器分布圏内においては，南部に集中しているようである。出土量に関しても，指宿市から，喜入町，鹿児島市へと錦江湾岸沿いに薩摩半島を北上してみた場合，各遺跡出土の指宿式土器内における指宿焼成色の土



第７図　中原VB類

器の割合は少なくなる。奥錦江湾岸の遺跡や薩摩半島西岸部の遺跡においては，１個体ないし数個体程度の出土量しか見ない。つまり，指宿地方以外の地域は，この指宿焼成色の指宿式土器の消費中心地ではないと言えるのである。また，指宿地方の対岸である根占町前田遺跡や田代町立神遺跡などで出土量が多いのは，鹿児島湾の中でも対岸との距離が最も近いのがこの周辺一帯であるからと思われる。こういった地理的な条件も加え，指宿焼成色の出土状況は，当時頻繁な交流と人による土器そのものの移動[3]があったことを示唆しているのである。

次に，粘土の移動なのか，土器の移動なのかという点について考えてみたい。大隅半島南部で出土する縄文土器には，ウンモ（金色を呈することから金ウンモと呼ばれることもある）を含むものが見られる。しかし，指宿焼成色を呈する指宿式土器の多くには筆者が肉眼観察した限りウンモは認められず，むしろ，指宿焼成色を呈しない指宿式土器には認められるようである。この事から，土器そのものが人によって移動した可能性が考えられる。今回は，詳細な胎土分析を行っていないために，この点に関してはその可能性を指摘するに留めておきたい。

では，なぜこの発色の土器が各地で出土するのか。土器そのものが搬入品である場合，人に伴って移動したことを指摘することができる。これは，器形・文様と言った土器を構成する要素についてある程度の共通理解をもった範囲（＝大領域）の中には，人や物が動く範囲（＝中・小領域）とがあり，大領域の中には複数の中・小領域があり，これらは時として部分的に重なり共有する部分を持つと考えられるのである。しかし，対象が土器という「モノ」である以上，突発的に遠隔地で出土する事例もあり得るので注意が必要である。

このように，指宿式土器の中における指宿焼成色を呈する資料は，指宿地方の在地粘土を用いていることから，型式分布圏内における移動領域，すなわち交流の断片を示すと思われるのである。

今回は，土器の色調から交流の断片について検討を行った。肉眼観察による分析のみであり，客観性に欠ける部分もあるであろう。また，温泉変質粘土を用いていても様々な要因により指宿焼成色を呈しないものも存在していると思われる。今後は，ウンモやカクセン石などの特徴的な混和剤などにも注意していく必要があろう[4]。これらの特徴に注目していくことで，交流の断片をつなぎ合わせ，当時の社会をより明確に再現出来ると思われる。

6　おわりに

以上のように，指宿式土器の分布圏において指宿焼成色を呈する資料は，在地にある粘土の中でも温泉変質粘土を用いたものであると思われる。そしてその分布は，指宿地方に多く，対岸部や熊毛地方などに見られることがわかった。加えて，周辺部から出土するこの色調のものは，土器そのものが搬入された可能性を指摘することができた。さらに，この発色は土器そのものに特殊性をもたらすものではなく，一様に深鉢形土器を用いた煮炊き具であるということもわかった。

先に述べたが，この指宿焼成色は指宿式土器や成川式土器といういずれも指宿地方に標識遺跡を持つ土器に多く見られる。何とも不思議な偶然ではあるが，なぜ指宿式土器前後の土器型式にはほとんど見られず[5]，古墳時代に再び現れるのであろうか[6]。

土器には，当たり前のことではあるが，器形や文様以外にも多くの情報が詰まっている。これらの情報を如何に引き出していくか，今後も様々な角度から土器を観察し，精進していきたい。

最後に，小稿執筆に際し多くの方から御指導・御教示を得た。末筆ながら感謝いたします。

池畑耕一　上床真　大窪洋晃　鎌田洋昭　金丸武司
小村美義　相美伊久雄　寒川朋枝　下大川司　堂込秀人
永濵功治　永野達郎　中摩浩太郎　中村耕治　中村直子
羽生文彦　繁昌正幸　東和幸　吉澤生　本田道輝
前迫亮一　彌榮久志　宮田栄二　宮下貴浩　元田順子
八木澤一郎　四元誠　渡辺徹也　（敬称略）

【　註　】

1　堂込氏によると，頴娃高校在職中に鳥巣周辺で採取した粘土を用いて土器製作を行った際に，本論のような色調を呈したとご教示いただいた。今回採取した粘土A・Bは，堂込氏が採集した地点とほぼ同じである。

2　鎌田氏によると，水迫遺跡調査の際に池田火山灰層中に桃色を呈する粘質土があり，これを素材として土器を製作するとこのような発色をするのではないかとのご教示を得た。氏のご厚意により，これが見られる露頭を探したが見あたらず，今回は断念せざるを得なかった。露頭採集の範囲を広げるなどして，今後継続して焼成実験などを行っていきたい。

3　器として土器が移動するのか，内容物を携えた移動なのかは不明である。加えて，集団移動に伴う家財道具的な移動の範囲と単体移動の範囲との差も考えなくてはならない。

4　この視点での取り組みとしては，本誌上において東和幸氏らによる研究グループによって論究がなされている。

5　付言したい。筆者が現在実見したかぎり，指宿焼成色を呈する縄文時代の土器は，圧倒的に指宿式土器に多い。しかし，指宿市大渡遺跡出土資料の中には，松山式土器・市来式土器中に各１点ずつ指宿焼成色のものが存在していた。また，垂水市柊原貝塚では，市来式土器の中に１点確認できた。さらに，胎土に違和感を覚えるが，田野町本野原遺跡でも市来式

土器に類似する資料中に1点確認することが出来た。しかし，これらの遺跡については出土資料の全てを検討したわけではない。よって，具体的な個体数など不明であるが，指宿地方では土器素材としての在地粘土の1つとして温泉変質粘土があり，これは時代を超えて存在し続けていたのかもしれない。加えて，南九州には多数の温泉があり，指宿以外の温泉変質粘土も素材として土器を製作していた可能性もある。註2と同様に，これからの課題として記しておきたい。

6　成川式土器における指宿焼成色の分布は，今回紹介した指宿式土器よりもやや狭い分布圏を呈する印象を受ける。しかし，東郷町五社遺跡から指宿焼成色の成川式土器が出土していると，宮田栄二氏よりご教示をいただいた。

【参考文献・報告書】

青崎和憲　1994「第Ⅴ章　まとめにかえて」『浅川牧（Ⅰ・Ⅱ）遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（10）鹿児島県立埋蔵文化財センター

指宿市　1985『指宿市誌』

開聞町　1994『開聞町郷土誌』

河口貞徳　1953「南九州における縄文式文化の研究－岩崎及び木ケ暮遺跡について－」『鹿児島県考古学会紀要』第3号　鹿児島県考古学会

1952「草野貝塚調査報告」『鹿児島県考古学会紀要』第1号　鹿児島県考古学会

河口貞徳・河野治雄　1955「鹿児島市春日町遺蹟発掘調査報告」『鹿児島県考古学会紀要』第4号　鹿児島県考古学会

国分直一　1955「指宿市大渡遺跡試掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第4号　鹿児島県考古学会

坂口浩一・黒川忠広　2002「第Ⅶ章　調査のまとめ　第1節（2）土器」『藤平小田遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）南種子町教育委員会

瀬戸口望　1974　「倉園遺跡採集の指宿式土器と其の他について」『鹿児島考古』第10号鹿児島県考古学会

立神次郎・堂込秀人　1989「第4章　各遺跡の調査」『鷹取遺跡ほか』中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）中種子町教育委員会

寺師見國　1943『鹿児島縣下の縄文式土器分類及び出土遺蹟表』鹿児島縣學術聖蹟調査會

出口浩他　1983「第Ⅳ章　南地区の調査」『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（24）鹿児島県教育委員会

戸崎勝洋・東和幸　1988「第Ⅶ章　古墳時代」『轟木ケ迫遺跡』大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）　大根占町教育委員会

戸崎勝洋・東和幸　1988「第Ⅴ章　遺物」『出口遺跡』大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）大根占町教育委員会

永野達郎　1999「第4章　縄文時代」『鈷地遺跡（縄文編）』喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）喜入町教育委員会

濱田耕作　1921「薩摩国揖宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告　第6冊』京都帝国大学

繁昌正幸・長野眞一　1992「まとめ」『新番所後Ⅱ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（62）鹿児島県教育委員会

本田道輝　1997「田中堀遺跡調査の概要」『川辺町郷土史追録』川辺町

松本直子　1995「土器の地域性に関する認知考古学的研究-縄文時代後晩期九州の地理勾配の検討を通して-」『鹿児島考古』第29号　鹿児島県考古学会

松永幸男　1989「土器様式変化の一類型－縄文時代後期の東南九州地方を事例として－」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ　生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会

水ノ江和同　1993「九州の縁帯文土器－九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題－」『古文化談叢』第30集（上）九州古文化研究会

三輪晃三　1998「第5章　南九州縄文後期再論－武貝塚出土土器の位置付け－」『武貝塚』奈良大学文学部考古学研究室

山川町　2000『山川町史（増補版）』

吉永正史・東和幸　1990「第3章　発掘調査」『立神遺跡』田代町埋蔵文化財調査報告書（2）田代町教育委員会

【資料出典】

第1図　筆者作成

第2図1～31　鹿児島県教育委員会　1983『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（24）

第2図32～第3図49　喜入町教育委員会　1999『鈷地遺跡（縄文編）』喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

第3図50　本田道輝　1997「田中堀遺跡調査の概要」『川辺町郷土史追録』川辺町

51・52　金峰町教育委員会　2003『上焼田A遺跡ほか』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

53・54　金峰町教育委員会　1991『木落遺跡ほか』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

55　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002『諏訪免遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（44）

56・57　鹿児島市教育委員会　1988『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

58～60　鹿児島市教育委員会　2001『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（32・33）

61～63　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003『中原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（54）

64・65　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003『上野原遺跡　第2～7地点　第5分冊』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（52）

66～68　鹿児島県教育委員会　1989『中ノ原遺跡（Ⅰ）』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（48）

69　鹿児島県教育委員会　1980『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（13）

第3図70～第4図93　田代町教育委員会　1990『立神遺跡』田代町埋蔵文化財調査報告書（2）

第4図94～101　根占町教育委員会　2002『前田遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

102・103　鹿児島県教育委員会　1983『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（25）

104　鹿児島県立埋蔵文化財センター　1994『浅川牧（Ⅰ・Ⅱ）遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（10）

105　中種子町教育委員会　1989『鷹取遺跡ほか』中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

106　南種子町教育委員会　2002『藤平小田遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

第5図　筆者作成

第6図　（喜入町教育委員会　1999）に加筆

第7図　志布志町教育委員会　1985　『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

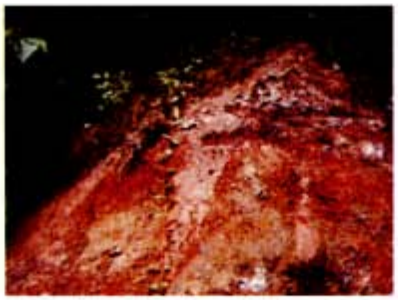


写真１　粘土Ａ採集地点

写真２　粘土Ｂ採集地点

写真３　粘土Ｃ採集地点

焼成前

焼成後

テストピースNo.11

焼成前

焼成後

テストピースNo.12

焼成前

焼成後

テストピースNo.13

写真４　テストピース焼成前後の色調

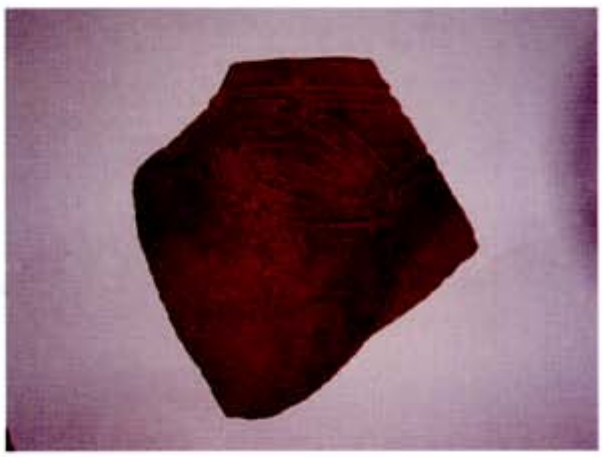


写真５　成川遺跡出土の指宿焼成色を呈する指宿式土器